
BeautiFoolのエッセイ 4

アルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beautiful Foolのエッセイ4

【Nコード】

N7734L

【作者名】

アルル

【あらすじ】

タイトル通りのエッセイシリーズです。今回は之までとは少々異なる内容となっております。然し、書き手、評価人共に是非読んで頂きたい物にしました。此れで僕のスタンスが確立された背景が分かるかと思えます。

今より少々昔、戦争が有った。そして、その傷跡は今も猶癒えない。その後、差別が起こり、それも又、今も猶行われている。そういった内容です。どうか、御一読下されば幸いです。

(前書き)

物書きには絶対的に必要な問題を挙げてみました。此れを無視、或いは蔑ろにする事は誰にも出来ず、又、そうするのならそれを正当化するだけの事を書き込んで下さい。猶、論点をずらす様な書き込みには、それ対応の対応を致します事をご承知下さい。又、学を以って論ずるならば、かつての世界を想像した上で語って頂きたいと思えます。

これはエッセイの第四弾である。之まで、『影響力の功罪』、『文章作法への疑問』、『文学に於ける学』について考えてみたが、今回は其れ等とは異なる内容にしようと思う。今回のテーマは、『近い昔と現状について』である。近い昔とは、自身の知る先の大戦に関しての、僕の祖父の記憶であり、現状とは言葉の通りである。それでは。

昭和初期、日本は諸外国との対戦に参加した。これは一々言うまでも無く、衆知の事実である。そして、敗れた事も又、そうである。内地での戦いでは、多くの一般住民も犠牲となった。多くの動植物も同じである事は言うまでも無い。その現場を撮影した記録画像は目を伏せたくなるものである。ノルマンディへの上陸作戦が基になった有名なアメリカ映画が話題となった為、それを目にした者達は戦争の残酷さ、哀しさを少なからず心に刻んだに違いないと、僕は信じたい。然し、あの映画には決定的なミスが有る為、エンターテインメントと捉えている者が多いかもしれない。同時期に発表された、同じく戦争を描いたアメリカ映画が有るが、其方の方がより命の何たるかを考えさせられる物であると、個人的には思う。それは人とは何ぞや、命とは何ぞやというシンブルかつ、究極の問題に迫った内容であった。これは、当時ゼミで映画批評をしていたが故に導いた考えである。であるからして、あくまでも個人的な意見である事を承知されたし。

無論、昭和以前にも、日本は大小様々な戦争に参加し、利を得て来た訳であるが、今回は其処まで遡るのは已よそうと思う。其の理由は、僕が無学であるからである。学んだ事は学んだが、複雑な事情は、僕の頭の中で判然としない為、又、参加した者の体験談なども聞く機会が無かったからである。そういう訳なので、どうか御容赦

の程を。

さて、先の大戦に於いて大敗を喫した日本国であるが、全体として見るのではなく、此処からは少々私情に於いて書かせて頂きたい。僕の祖父は先の大戦に参加した。其処では毎日敵味方を問わず人が死に、又、殺していた。共に戦った仲間が、自身の隣で爆散するのを目の当たりにしたとも言っていた。はつきりとは聞いていない、いや、聞くに忍びなかった為、ただ昔話の様に聞いていたが、実際には彼自身の生存の為、敵の幾人かは殺しているだろう事は想像に難くない。そういう世界なのである。

その後終戦を迎え生き延びた彼は、シベリアへと送還され、暫らくの間抑留された。其処でも生き死にを賭けた遣り取りが有ったのは言うまでも無い。彼は笑って話して呉れたが、その胸中は僕等が想像する事の出来ないものであつたらう。何しろ、僕等は命の遣り取りを知らないからである。それを示す様に、彼は夢の中で何時も悪夢と戦っていた。トラウマとなった記憶に因る呪縛である。簡潔に言うと、彼はPTSDに罹っていたのである。僕はその当時文字通りの子供であつたが、その事実を知っていた。そして、其れから開放する術も漠然とではあるが解っていた。然し、僕は逃げた。事実から、優しかった祖父から。自身の神経衰弱を理由に。そして、彼は亡くなった。最期まで、僕は役立たずだったのである。

僕は悔いた。今からすれば馬鹿な事だが、当時の自分はあまりにも弱かつた。そして、社会からも逃げた。如何し様も無い程に怖かつたのである。社会も、其の中で生きる人間達も。漸う立ち直れた頃には、随分と時間が経っていた。正確には数ヶ月であるが、僕からすれば、もう何年も陽の光を浴びていない様に感じた。此れでは不可ないと思えたのは、やはり祖父の存在が僕の存在を肯定する事実であつたからである。彼が居なければ、僕は勿論居ない。なれば、僕は僕の生きた証を祖父の生きた証とすべきだと考えるようになって。それが、今現在の頑なな僕に繋がっている。敵が居ようと、打ち倒す。それをせずして、祖父の存在を証明する事など適わぬ。そ

う考えるのである。文才は無くとも、書く事は出来る。伝える事も出来る。それが、僕の人生なのである。アンチアルルと言われようとも、僕は僕の信じる事を為す。そうでなければ、死有るのみ。僕にとつて書く事は、生きる事と同義なのである。

之までの件で、何故僕が憤っているか分かる人も居るかと思うが、テーマに挙げたように、昔と現状についての記述が無ければこれは成立しないので、此処からは現状について考えてみたい。

現状とは、先に提示した通りの意味合いであるが、更に補足したいと思う。此処で考察すべきは、先の大戦に於いて犠牲となつた者達が守つた世界、詰まり、人間の生きる世界である社会である。この定義で、現状という言葉の意味がより良く理解出来る様に思う。世界とは即ち、喰うか喰われるかのプロトコルに準じたものであり、社会とは、日本国に於いては、『公共の福祉』の名の下に展開されるものである。実の処、公共の福祉とは仮初の平和を作るだけの考えであり、又、権力者に都合の良い様にする為のものである事は知つていられるか。簡単に言えば、小数点の切捨てである。此れは大いなる悪である。実際に被害に遭つている人達を僕は知つている。僕も其の一人だからである。勉強など必要無く、実感せざるを得ない立場に居る。だからと言って、全否定する訳ではない。『緊急避難』などの対策を鑑みれば、頷かざるを得ない事情も有る。然し、社会の主軸とするにはあまりにも惨い考え方である。差別と何ら変わりが無いからである。法学に長けた者には是非問いたい。その考えに完全に同調出来るか、と。極論で語るのは危険であると忠告を受けてはいるが、僕はどうしてもそう考えざるを得ない。少数の切捨て、弱者の見殺し。其れが罷り通る世の中とは本当に心の有る人の世であるか。僕はそうは思えない。此れにもきちんとした理由がある。僕は学生の頃、社会学と出会つた。その学問を教えて呉れた先生は、心から尊敬出来る人であつた。学んだのは、社会的弱者の存在と、其れに対する差別である。特に、誤解から成る差別は僕の心を大きく揺さぶり、考えを改めさせて呉れた。何に対する誤解かと

言えば、それは病気である。古くはハンセン病、最近では水俣病である。ハンセン病に至っては、まるで人外の類の如く扱われ、高い塀に因つて隔離された。其処へ持つて来て誤解が広がり、当時の健常者達は石を投げ入れ、時にはぶつけていたという。水俣病もまた同様であり、移るといふ噂が流布され、往來に出ようものなら容赦なく罵声を浴びせ掛けられ、これも石を投げ付けられたという。原因となったのは、確か水銀であつたと思うが、其れを食べた魚を摂取した人達が蝕まれ、多くの犠牲者が出た。漁港に出入りする野良猫なども同じく罹り、踊り狂いながら海へ飛び込んだという。此れは実際に記録画像として残されている。

そういつた事実から、少数の切捨てが如何に危険であるのかが解つて頂ければと思う。被害に遭つてみないと解らないという意見は、此処に至つて、どうか捨てて欲しく思う。古書を読むと、平然とそうした事が行われている事から、この国は悪しき慣習に取つて喰われているものと考えられる。此れでもまだ平気でいられる者には、僕自身の考えから、正当な悪意を差し上げたいと思う。解り易く言えば、戦う意志を表明する、という事である。ワイヤードにしる、リアルワールドにしる、簡素なヒューマニズムに縋る連中とは命賭けで対峙するのが僕の信念である。此れは余談ではあるが、以前知り合ひだった男が人間は、弱者であろうとなかろうと裁かれるべきではないと言つていた。僕からすれば欺瞞である。それでは、世界はどうなるのか。人間を尊重し、世界に対し御座なりになるというのは、完全なる矛盾である。人間が何処に生きているのかを完全に失念している。こういつた考えが、僕の言う簡素なヒューマニズムである。エゴであり、インディビジュアルであり、又、ナショナルイズムである。其れらに縋る者は純粹なパラノイアである。自身の保身の為に、人を泣かせて平気な輩である。そう言い切れるのには訳が有る。先述に有る男の存在は勿論、現実にそういう者達と合間見えているからである。僕の考えが傲慢であると思うのなら、是非に教えて欲しい。何が正しく、何が間違いなのかを。当然、此処まで

の内容を理解した上ではあるが。又、偉そうな物言いだと思えば此れも是非に御教授願いたい。誰の御蔭で、今こうして生きていられるのかを。僕の勘違いなら、平伏して御詫びしよう。

どうも回りくどい言い口は治らないらしい。どうか、御容赦願いたい。然し、どうだろう。耳を傾けて呉れた人は何かしら思う事が有るのではないだろうか。命を賭けて守った世界。そして、其の尊い世界の現状。此れで果たして良いのであるか。時代の趨勢とは良く言ったものである。そんなものは上がった連中の仕組んだ事。僕が憤っているのは、其れを黙認する、或いは、黙殺する連中がマジョリティという言葉の下、先人達の命を蔑ろにする様な振る舞い、又は、発言をしているからである。僕自身に才能が無いのは、既に宣告されているので解ってはいるが、才無きからといって黙っている訳には行かない。もう、解っているのに遣らないなどという愚を犯す気は無い。であるからして、こうして書くのである。何時果てるともしれない体であるのだから、残せる物は残しておかねばならない。此れは何も僕に限った事ではないと思う。

此れらを踏まえた上で、現文壇に対しても言及したく思う。まず、人にウケるからアリ、という考えはあまりにも商業的過ぎる。又、社会の人気者が書いたからという理由で出版される物もどうかと思う。僕等は本当に其れを肯うべきなのだろうか。少なくとも僕はそうは思わない。認知されるといふ要素は必要ではあるが、後先考えずに書かれた物、即ち、インスタントである物が横行して良いものであるか。甚だ疑問である。そうしたければそうすれば良いが、僕だけは認めない。犠牲の基に在るこの世界を、単純なる情緒に委ねるなど到底出来はしない。忘れては不可なのである。多くの命を以ってこの世界が在る事を。研究に努むるのも良い。新天地を目指すも良い。然し、忘れて良いものなどこの世には無いのである。心の傷は生涯癒えない。今でも苦しんでいる人達が居る。其れを置去りにして歩こうというのは身勝手である。どうすれば良いのかは自由ではあるが、万人に共通する義務は、法の下以外にも有るのでは

ないか。誰もが命を賭けているのなら何も言う事は無いが、之から生まれ来る命に対し、何を残すべきなのかは考えなくてはならない。人生は一度きりなどと言うのは、其れらを考えた後でも出来る筈である。よもや、そんな必要等無いとは言うまい。いくら僕に文才が無いとて、いくらこの文章が稚拙だとて、考える切つ掛けにはなる筈である。どうしても僕の言う事が理解出来ないのなら、本を読めば良い。書籍となつている物ならば、もつと解り易い筈である。この場がケイタイ小説を投稿する為のものである事は承知している。然し、僕は社会に対し、相当の影響力を持たないからして、こういった場を利用するしかないのである。無礼は百も承知。退会を望む者が多数居れば、其れでも結構。然し、この物に関してはケンカはしたくない。だからこそ、御願ひしたい。どうか、忘れないで欲しい。僕等はただ生まれ来て来た訳ではない事を。そして、それぞれに出来る事が有る事を。それが誰に対してかは問わない。笑顔でいたい。笑顔にしたい。之までは酷く抽象的で、偏つた意見ばかりを書いて来たが、此ればかりはどうか正面からぶつかつてみて欲しい。そして、己が答えを探して欲しい。きつと無駄にはならないと僕は思う。ラノベを書く者、文学を書く者、或いは其れ以外を書く者。どの様な物を書くにしろ、役立つと信じている。哀しみを知れば、幸福も知る事が出来ると信じる。紡ぐは言の葉。伝えるは心。其れが物書きの本来であると僕は考える。又、其れが第一義であると確信する。商業的に言えば何の役にも立たない考えではあるが、其れを忘れてしまつては最早物書きとは言えない。先生と呼ばれるばかりが小説家ではない。成功者の本質を知らずして、文豪などと言つては不可ない。自身の想いに正直である事こそが、物書きに必要な事であると思う。其れが両立出来て初めて先生と呼ぶに相応しいのである。僕がこうして言い切るのは自身に対し、又、読み手に対し、嘘を付かない為である。曖昧に語るのは好きではない。漠然としていて解り辛いのは僕の不手際であるが、決して嘘は付かない。自身の言つた事には責任を持つ。命を賭ける。其れが、犠牲となつた先

人達への礼儀である。又、義務である。僕はそう考える。生きているのは彼等の御蔭なのだから。之から先もこのスタンスには変わりが無い。其れが、僕のケジメ。考え方は変化したとしても、其ればかりは譲れない。此れを読んだ方にはどうか御理解頂きたい。僕の覚悟と、其れを構築する先人達の犠牲を。そして、今猶苦しむ存在を。この世界の基を。簡素になつて行く社会を。忘れないで欲しい。考えてみて欲しい。自身の在り方を。どう振る舞い、どう生きて行くのか。其れを決めるのは彼氏彼女の自由。然し、履き違えてはならない。自由の本質を。こんな駄文では駄目かもしれないが、届いたなら改めて想つて欲しい。世界に生きる命を。又、生まれ来る命を。僕等に出来る事が、きつとこの先の社会に少なからず影響を及ぼす事を。其れが、先述の様な酷い結果にならないことを祈らずにはいられない。僕など所詮愚者である。であるから、博識かつ、才有る者には、是非とも今は昔などとは言わないで欲しい。

悪い癖であるが、前回の学というテーマを持ち出してみたい。意味合いは変わらない。然し、問い直したいのである。学を以つて論ずる者達は、こういった現実を知っているのか。又、知っていて、其れを持ち出さないのか。文学に於いて、之まで記述した様な知識を持つている事は、個人的には必須であると考えるのであるが、如何であるか。歴史を勉強する上で、避けては通れない問題であると考えるのは僕だけであるか。学を以つてして語るの点に於いては文学其の物の歴史や、心理学だけでは足りない。ロジックである数学を加えても足りない。人を描くには、やはり人の歴史を知らねばならないと思う。たとい、それが惨たらしいものだとしても。敢えて具体的に書きたい。人は人を殺す。先人達は生きる為、又、守る為そして、世界は守られた。現状に於いては自身のプライド、又、立ち位置を守る為。そして、差別が生まれ、少数は切り捨てられている。生きる事を保障したとて、人らしくあろうとする事が認められないならば、其れは即ち生存の許可である。又、生存の強要である。誰が為に生きているのか、一度くらい立ち止まって考えてみて欲し

い。自身の為、或いは社会の為、又或いは、誰かの為。自身が決めた事であるのなら、其のどれでも良い。違った生き方でも良い。然し、其の為に泣く者が居る事だけは忘れなくて頂きたい。其の上で、学を極めるべく努めて欲しい。そうでなくば、其れは知識として保管されるだけであると考える。情報と成すべく努むるならば、やはり、考えた上での事とされたし。

あまりぐだぐだと書いてはキリが無いのでこの辺で締めたと思う。僕は先人の犠牲の上に、今を生きている。生存ではなく、生きている。想い、考え、そして、出来る事を遣ろうとしている。其れは僕の本来であり、であるからして、其れを終えたなら僕の生きる理由は無くなる。僕は其れで良いと思う。犠牲に対し、甘んじて人に成る積りなのである。皆はどうであるか。体の限界まで生きていたいと願うのであるか。其れは其れで良い。然し、世界のキャパシティと、エコという名のエゴが連綿として有る限り、この星の命は長くない。星に生きるには星の命が有る事が前提である。やがてこの星も自転を止める。息果てる。宇宙とて其の例外ではない。エントロピーの増大は進行形であるからして、其の消滅は止められない。全てはプロトコルに沿っているのである。とんでもない程に飛躍しているが、此れは事実である。ならば、この短い期間に起こった悲劇と、現状に於ける悲劇とを、自身あまりにも短い人生の片隅にでも置いて貰いたいと僕は考えるのである。久遠とも思える世界の命を美しいと感じるならば、其の世界に生きている事を感じて欲しい。様々な生き方が有る中で、忘れては不可ない事が自身の生を象っている事を知って欲しい。あの時こうすれば、という後悔を大切にしたい。僕には此れ以上の事は言えないが、然し、此れくらいの事は言えるのである。きつと皆はもつと沢山の大切な事を持って生きているのだと僕は信じたい。だからこそ、切に願う。今在るのは、意味有る事だと思える様に。是非とも御願いたい。どうか、御願いたい。

(後書き)

如何でしょうか。何か思う処はお有りでしょうか。無いという方は居られないと思います。哲学、社会学、心理学、世俗、日本の風俗の研究だけでは意味の有る小説は書けないと僕は考えますが、読まれました方、どうでしょうか？ とにかく、読んで頂いた方にはお礼申し上げます。有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7734/>

BeautiFoolのエッセイ 4

2010年10月8日14時48分発行